

# 国際法学者、 初めて南極に立つ！

柴田神戸大学教授第58次観測隊同行結果報告

**柴田明穂**

神戸大学大学院国際協力研究科・教授(国際法)  
極域協力研究センター(PCRC) 長

# 国際法学者、初めて南極に立つ！

- \* 一地球市民として、南極への更なる関心と興味を深めることができた。
- \* 一国際研究者として、南極における「現場主義の国際法研究」の意義を再確認できた。→執筆中の書籍で後日報告。

## 目次

### 第1章 国際法学者、初めて南極に立つ！

ロマンの国際法・・・風呂の中のラミング・・・建設現場、夏の昭和基地・・・南極条約4条のマジック・・・ペンギン900羽に逢いに行く道・・・ラングホブデ雪鳥沢：南極特別保護地区・・・サファイア発見！・・・南極条約体制をめぐる2つのフィールド・・・参考文献

「国際法により保護しようとする南極の固有の価値には、科学的調査を実施するための地域としての価値に加えて、ウィルダネスの価値、美しさの価値も認められている。南極という特殊な地におけるこれらの価値の意味合いを実感し、それら価値を享受しつついかに保護・推進していくか、そしてそれらの相互調整をどのようにしたら良いかを実践的に考える。南極条約体制の実効性を考察する上で、現場主義の国際法研究が重要でありまた必要であることを、ここ南極に実際に立って実感した。」

# 国際法学者、初めて南極に立つ！

\* 世界的に注目される極域大型研究への社会科学研究的取り組み。例：EU PolarNet 2015-2020

❖ 第9回北極社会科学国際会議(ICASS IX、スウェーデン・ウーメオ、2017.6.8-12)

17.7 Incorporation of Social Science and Humanities in large EU and other projects (Brigitta Evengard他報告)

❖ SCAR人文社会科学専門家会合(HASSEG、タスマニア・ホバート、2017.7.5-7)

Workshop: Towards the Incorporation of the Humanities and Social Sciences into Large Polar Research Projects (Renuka Badhe司会、柴田他パネリスト)

\* JAREに国際法学者が参加したことに、世界の極域研究関係者が注目している。→日本が次世代の極域研究の姿を示した？

# 国際法学者、初めて南極に立つ！

- \* 高まる「南極の地政学的変化」に関する議論と、それを踏まえた南極科学及び南極国家事業のあり方の検討。

Yale Journal of International Affairs誌  
「南極の争いを回避する」と題する論文(2017年2月17日)

Independent誌  
「科学の平和的ハブと  
しての将来の南極を脅  
かすナショナリズム」と  
題する記事(2017年3月  
27日)

# 日本の南極地域観測事業の現状と将来について感じた強い『危機感』

## 本日の報告のメインテーマ：

JARE事業計画の立案や評価に関わった前委員として、JAREの今後のあり方に関する議論において参考にしてもらいたい感想や提言

## その前提として：

- ✓ 個別の活動に属さないが故、現地で事業の全体を見渡すことができたこと。様々な隊員から意見聴取できたこと。
- ✓ 初めてであるが故、先入観なく観察・聴取できたこと。
- ✓ 他方で、1回限りの体験を一般化することの危険性も承知していること。
- ✓ 個々の隊員ではなく、組織としての事業に対する意見であること。

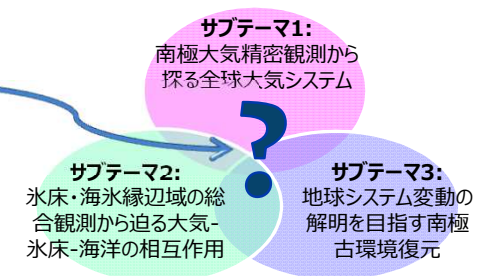
# 日本の南極地域観測事業の現状と将来について感じた強い『危機感』

## 1. 南極昭和基地周辺活動に、新たな「価値」を見出すアイデアの必要性

- ✓ 現行科学観測活動に行き詰まり感。ワクワク感がない。
- ✓ 60周年記念事業で、未だに30年前の研究成果に言及。長期モニタリングの必要性は言っても、そこから得られた「ブレークスルー科学的成果」が無い。
- ✓ 60年の遺産が重しとなって事業全体の硬直化(細分化、官僚化、ルーティン化)を招いていないか。

- ✓ 現地で活動する科学者が、3つのサブテーマの「統合」を意識しているようには感じられなかった。

重点研究観測メインテーマ  
「南極から迫る地球システム変動」



# 日本の南極地域観測事業の現状と将来について感じた強い『危機感』

**昭和基地を拠点とする活動を前提とするのであれば：**

- 極地研内からの改革：若手の優秀な研究者に期待。
- 新領域を開拓できる研究者の新規参入を奨励。
  - 公開利用研究は、もっと目的を明確にし、場合によっては事業費で一部経費補填した上で拡充すべき。JAREの当面の試金石。
- 外国の研究者、交換科学者の増大→昭和基地周辺研究プラットフォームの国際的魅力的メルクマール。更には、昭和基地を「アジア基地」として順次開放していったらどうか。
- 南極に関する学際研究（文理連携）及び国際的教育拠点（若手研究者養成機関）として再生してはどうか。
- **しかし、往復「しらせ」の4ヵ月は長すぎる。航空網利用した短縮化必須。**

# 日本の南極地域観測事業の現状と将来について感じた強い『危機感』

## 2. 東南極で展開し始めている航空網構築と活用に、日本は乗り遅れていないか？

- ✓ 昭和基地周辺の「アクセスの困難さ」を理由とした、「しらせ」依存発想の転換。あまりに費用が高すぎ且つ軍艦故の柔軟性無い輸送船。海洋観測船としてのスペックも中途半端。
- ✓ 航空機利用が主流になることを見据えた輸送手段と基地の維持方法の発想の転換。

露：Molodyozhnaya飛行場再開か？

中国：中山基地周辺に滑走路計画

豪：Casey基地周辺に露岩滑走路建設を計画。氷床上滑走路より転換。

伊：Zucchelli基地滑走路を氷床上から露岩へ



# 日本の南極地域観測事業の現状と将来について感じた強い『危機感』

## 3. 南極基地と南極科学の関係再考：昭和基地（及びその周辺）の50年後を見据えた科学的価値の再評価

- ✓ 昭和基地周辺で行われる日本の科学に世界的先端性感じられず。

第IX期計画：「共同利用・共同研究を通じた世界トップクラスの科学的成果の発信」

- ✓ 「昭和基地ありき」の発想の転換、もしくは永遠に昭和基地を維持することの戦略的（地政学的？）意義づけ。
- ✓ 「長期モニタリング」はそれ自体では説得力ない。自動観測化、AIの導入など。

他方で、新基地設置に対する国際社会の目はますます厳しくなっている。

（韓国2つ目、中国5つ目、インドMaitri基地の建て替え→）



# 日本の南極地域観測事業の現状と将来について感じた強い『危機感』

相当思い切った長期事業計画の練り直しと、そのためのプロセスの立ち上げ必要：提言

- 戦略的方向性を示す「24ヶ年南極(極域)観測事業戦略計画」とその実施計画としての6ヶ年計画の組合せ。
- 「南極(極域)観測事業戦略検討委員会」の立ち上げ：文科・外務・防衛・環境等の担当省庁課長級＋極地研所長・南観センター長・北極センター長・若手研究者＋専門家(南極科学・南極条約体制・南極国際関係・南極輸送(船と航空)・南極環境保護など)で構成。適宜WGで課題毎に集中討議、原案作成。
- ある程度の頻度で戦略検討委員を、JAREに参加させる。
- 「しらせ」後を考えれば、直ぐにでも立ち上げが必要。

# おわりに

第58次隊員及び同行者、「しらせ」乗組員、極地研関係者、文科省計画委員会関係者の皆さまの多大なご努力により、今回の南極行きが実現しました。心より感謝申し上げます。

その報告が、このような批判的内容であったことに驚かれた方もいると思います。今回南極に行ってその自然の魅力と学術的な魅力に接し、日本の南極地域観測事業の重要性を再確認してきました。今後更に60年、この事業が学術的にもまた日本の国益の観点からも有意義な形で継続することを願ってやみません。

そのための「建設的な批判」であるをご理解頂けると幸甚です。